SCW黒体放射光による天体核物理の研究

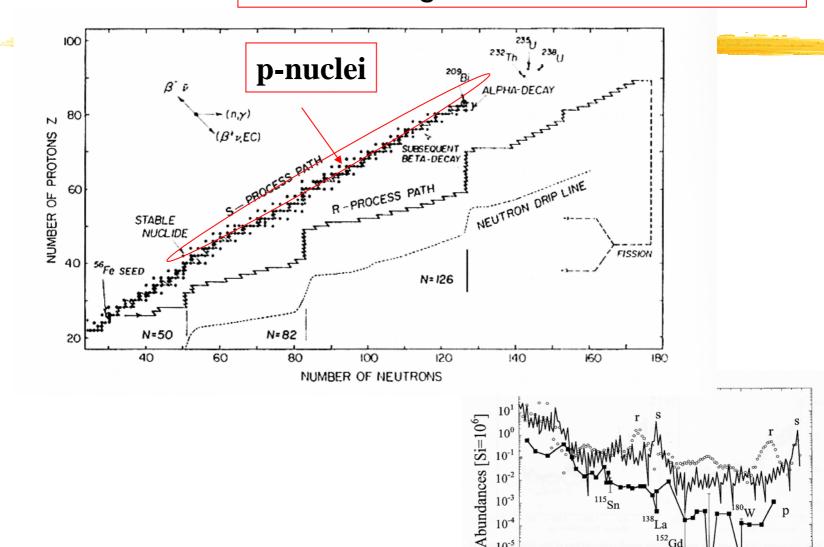
2006年2月9日 SCW放射光利用計画ミニワークショップ 主催 SPring-8加速器部門 世話人 米原博人、早乙女光一

宇都宮弘章 (甲南大学)

- 1. 天体光核反応とは
- 2. SCW黒体放射光の魅力
- 3. (γ,n)反応 放射化実験
- 4. (γ,α) (γ,p)反応 直接測定
- 5. 先端研究拠点事業とSCW放射光
- 6. ガンマ線源の将来像

重元素の起源

₩ 35 中性子欠乏安定核 ⁷⁴Se - ¹⁹⁶Hg



 10^{-2} 10-3

 10^{-6}

80

100

140

A

120

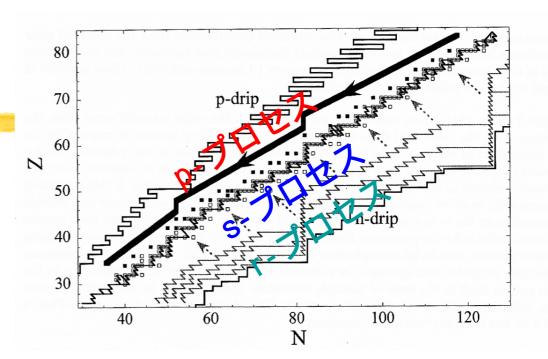
160

180

200

p-プロセス

Arnould (1976)
Woosley & Haward (1978)
Rayet et al. (1995)
Rauscher et al. (2002)
Arnould & Goriely (2003)
Utsunomiya et al. (2005)

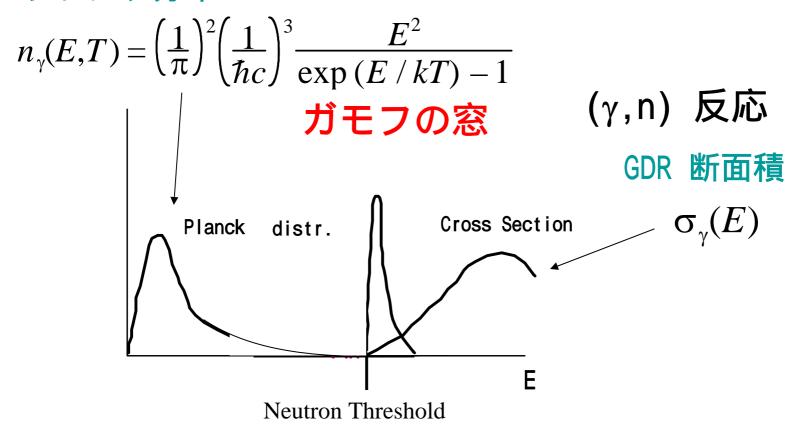


- **第** (γ,n)(γ,p)(γ,α) 光核反応と n-, p-, and α- 捕獲反応
- **# 2000 核種,20000 反応:弱い相互作用による核変換を含む**
- # 有力な宇宙環境: 超新星爆発前の重い星の0/Ne層 または Type II 超新星爆発の0/Ne層

基底状態にある原子核の光核反応

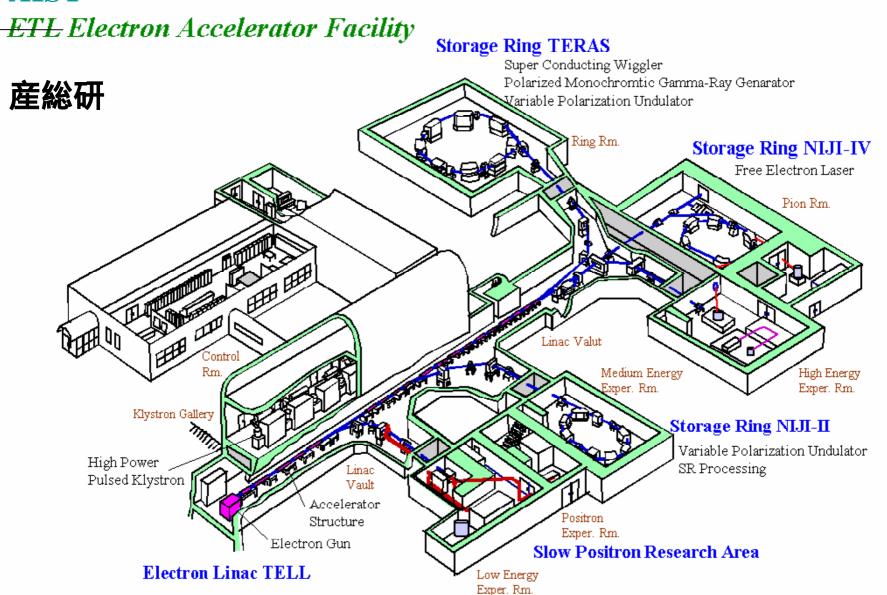
$$\lambda(T) = \int_0^\infty c \ n_{\gamma}(E, T) \ \sigma_{\gamma}(E) \ dE$$

プランク分布

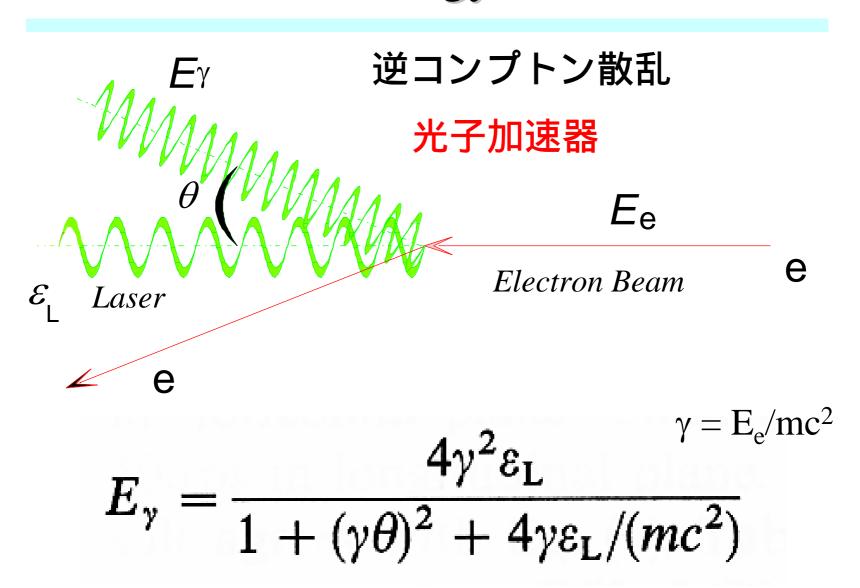


AIST

準単色ガンマ線の生成:第1世代LCSガンマ線



• Energy $E_{\gamma} = 1 - 40 \text{ MeV}$



光エネルギー広がり

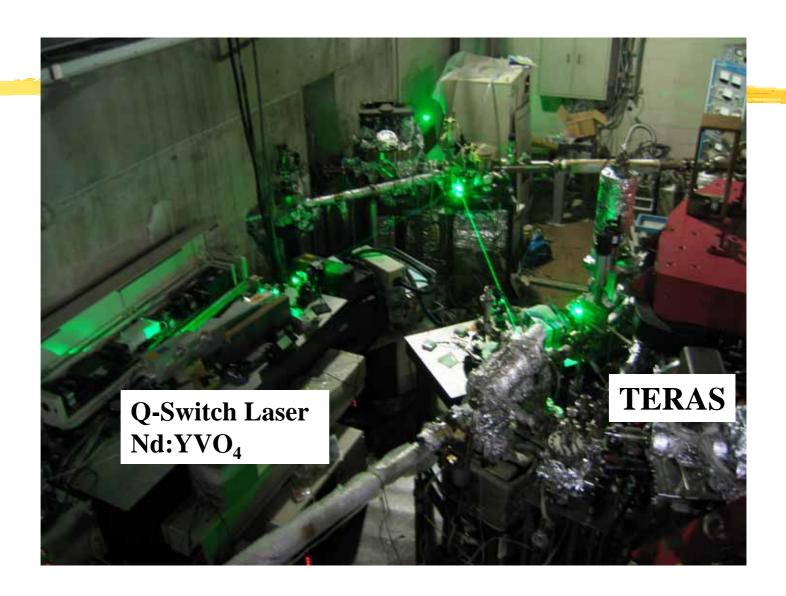
$$\Delta E/E \cong \sqrt{\left(2\frac{\Delta E_e}{E_e}\right)^2 + (\gamma \Delta \theta)^4}$$

$$\Delta\theta^2 = \theta_e^2 + \theta_c^2$$

電子ビームの角度分散

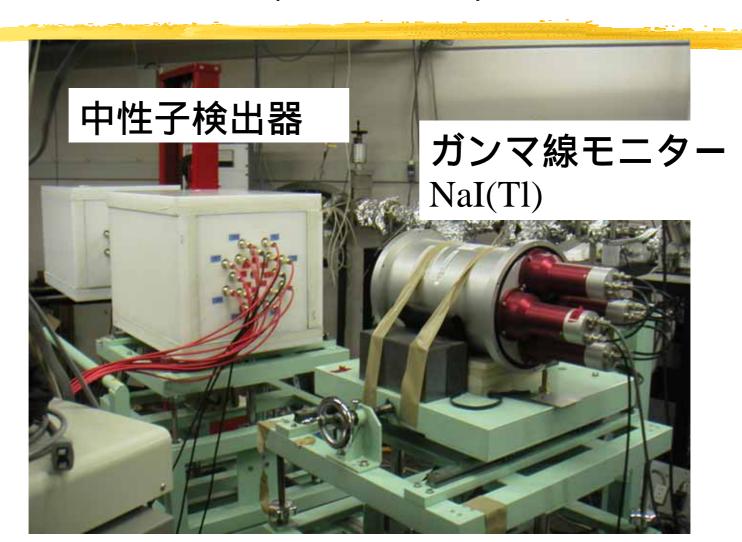
コリメーターの角度広がり

レーザーシステム



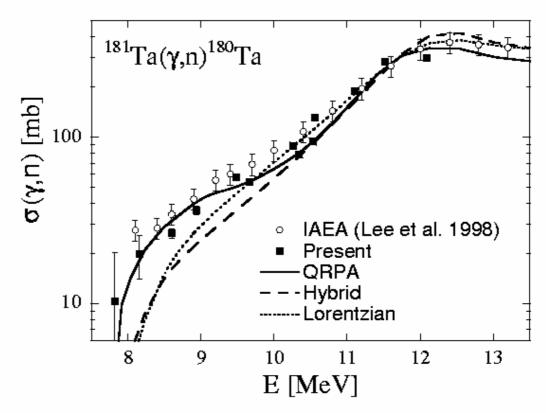
トリプルリング中性子検出器

20 3 He counters (4 x 8 x 8)



180Ta (奇奇核) 天然に存在する唯一の核異性体 最稀少同位体

¹⁸¹Ta(γ,n)¹⁸⁰Ta 生成断面積の測定 H. Utsunomiya *et al.* 2003 Phys. Rev. C63, 018801



甲南大学の産総研での研究実績と予定

```
 (γ, n)反応
```

実績 1 3 核種 D, Be-9, Se-80, Zr-91,-94, Pd-108, La-139, Pr-141, Sm-152, Ta-181, W-186, Re-187, Os-188

予定

Zr全安定 5 核種(Zr-90,91,92,94,96) Se全安定 6 核種(Se-74,76,77,78,80,82) Pd核種(いくつか) Nd全安定 7 核種(Nd-142,143,144,145,146,148,150) その他

測定が困難な核種:Ta-180, La-138等(存在量が少ない) 測定が困難な反応: $(\gamma,\alpha)(\gamma,p)$ 反応(反応断面積が小さい)

光源の属性

- **#1** 強度
 - 2 単色性
- 3 エネルギー可変性
- 4 偏光性
- 5 際立った個性 SCW黒体放射光

三大光源と研究スタイルの比較

₩ 制動放射光 (bremsstrahlung)

TU-Darmstadt, Stuttgart等

高強度連続光

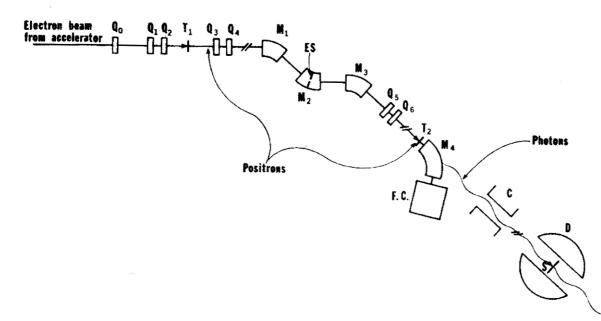
原子核物理研究専用施設として現役であり、研究の生 産性を維持している。

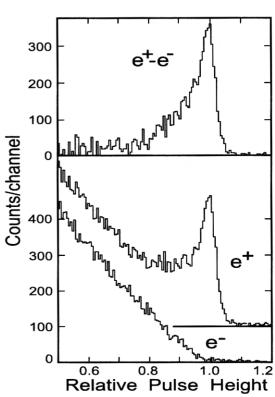
n(E) (E)dE をunfoldingするいろいろなデータ処理 法が開発されているが、光核反応断面積の励起関数 測定には本来不向き。

(γ,γ')NRF実験と放射化実験が中心

光飛行陽電子対消滅ガンマ線

ローレンスリバモア, サクレー研究所 準単色エネルギー可変 陽電子制動放射のバックグランド 1960-80に巨大共鳴の研究で功績を 上げたが現役引退。





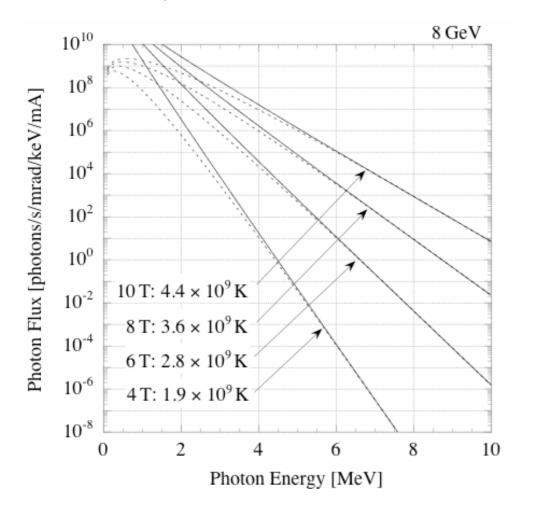
#レーザー - 逆コンプトンガンマ線

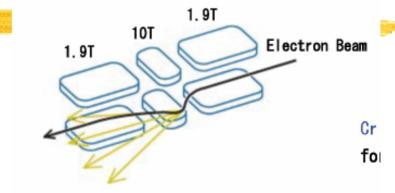
産総研、HIGS (Duke大), ニュースバル, 佐賀 現役でもっとも有力なガンマ線源 準単色エネルギー可変低バックグランド 100%偏光

- ・放射光施設内ではマイナーな存在
- ・産総研は第1世代LCSガンマ線、研究実績がある。
- ・NEW SUBARU, SAGAは第2世代LCSガンマ線。本格利用に向けて開発が進められている。
- ・HIGSはFEL逆コンプトンガンマ線を供給。世界で唯一の原子核物理研究専用施設であるが、ビームの安定供給と研究者の体制に問題がある?

SPring-8 超伝導ウイグラー(SCW) 黒体放射光 オンリーワン(唯一無二の光源)

Utsunomiya et al., 2005 NIMA538, 225





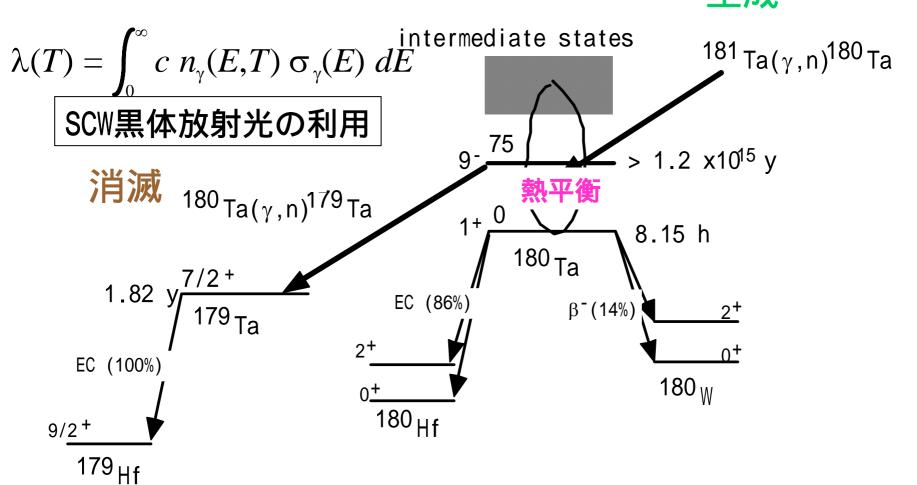


180Taの光消滅反応

 180 Ta $[0.012\%](\gamma,n)^{179}$ Ta $[T=1.82\ y]$

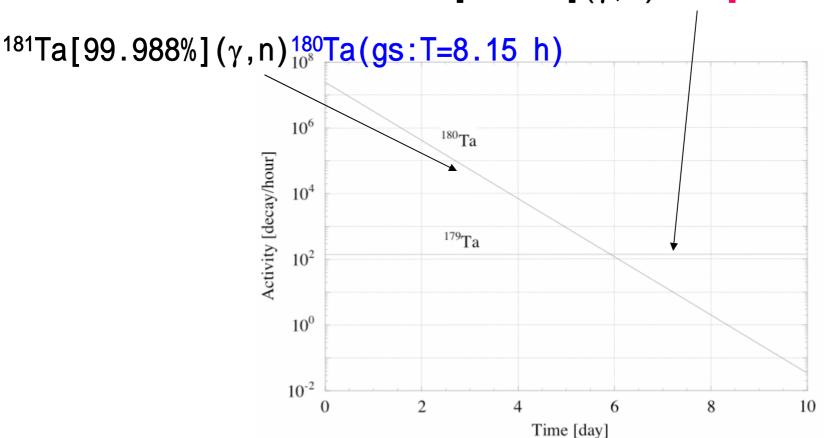
産総研ガンマ線の利用

生成



測定の困難な反応 SCW黒対放射光によるTa-180の光消滅

¹⁸⁰Ta[0.012%](γ ,n)¹⁷⁹Ta[T=1.82 y]



測定の困難な反応 SCW黒体放射光による(γ,α) (γ,p)反応の測定

イベントレート > 10¹⁻³/時間

₩35個の(γ,α)反応が測定可能

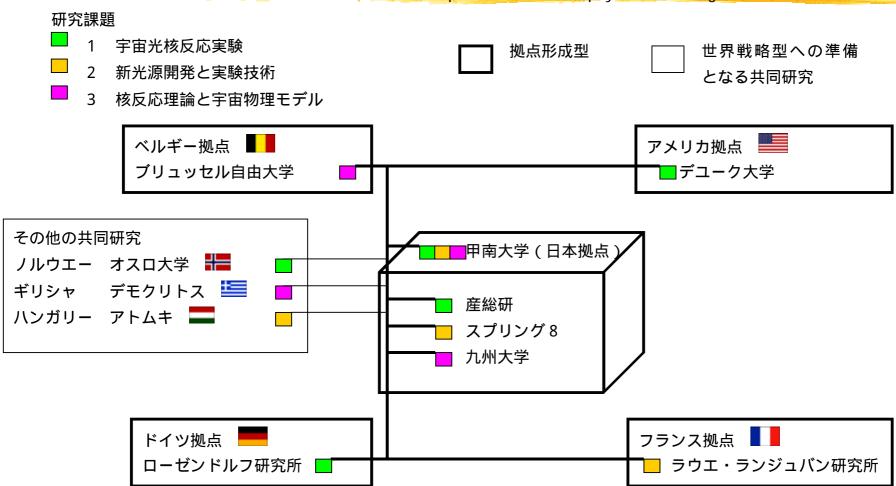
36個の(γ,p)反応が測定可能

α,pの直接測定が必要。

宇宙光核物理学の新展開(アフロディテ): 核反応実験から宇宙物理モデル構築まで

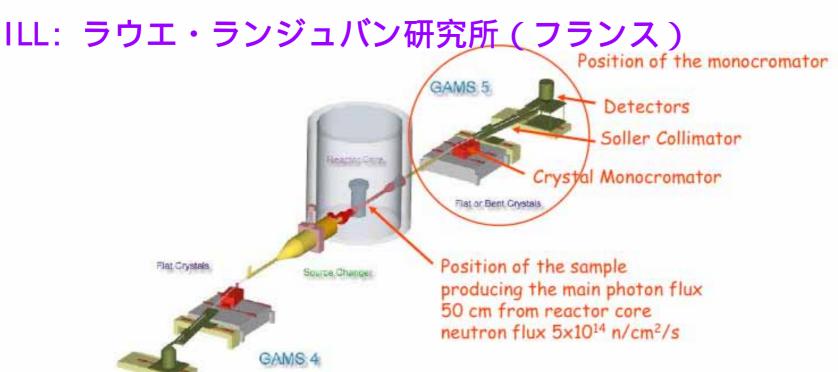
Advances in Astrophysical Photoreactions and Disintegrations (APHRODITE):

from nuclear reaction experiments to astrophysical modeling



単色中性子捕獲MeVガンマ線





開発中: Jentschel, Mutti & Boerner



MeVガンマ線用モノクロメーターとコリメーター系



₩ 展望

1 新光源の開発により光核反応研究の新たな展開が期待できる。

個性的な光源

SCW黒体放射光(SPring-8) 単色MeVガンマ線(ラウエ・ランジュバン研究所)

2 日本では、今後 5 年が第 1 世代LCSガンマ線から第 2 世代LCSガンマ線 への転換期: NEW SUBARUとSAGA

強度と単色性 。エネルギー可変性 波長可変OPOレーザー。

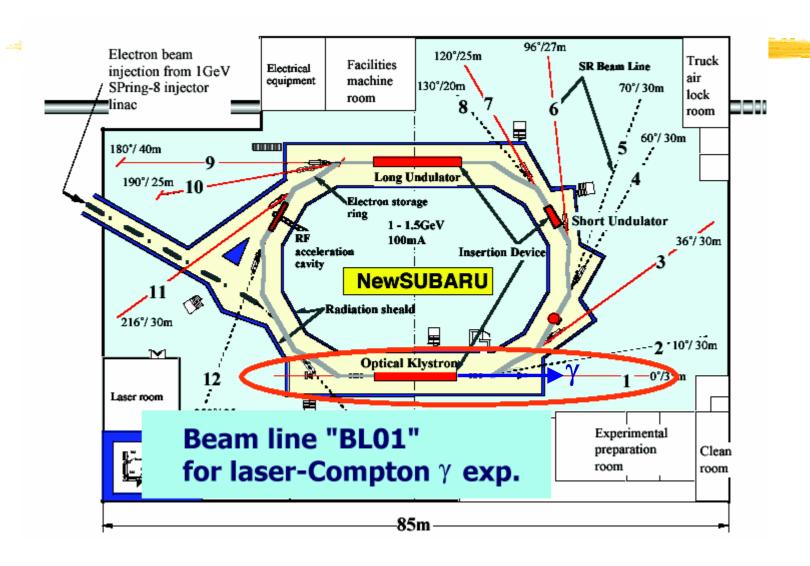
3 SPring-8にSCW黒体放射光ビームラインが稼働し、
NEW SUBARUとSAGAの放射光施設に第2世代LCSガンマ線ビームライン
が稼働すれば、日本が従来の原子核物理研究の壁を打ち破って光核
反応の研究をリードすることができる。

高い研究の生産性を誇る複数の研究グループが形成されること。 人材育成がカギ。物理で済み分け(天体核、原子核、原子力核データ)。

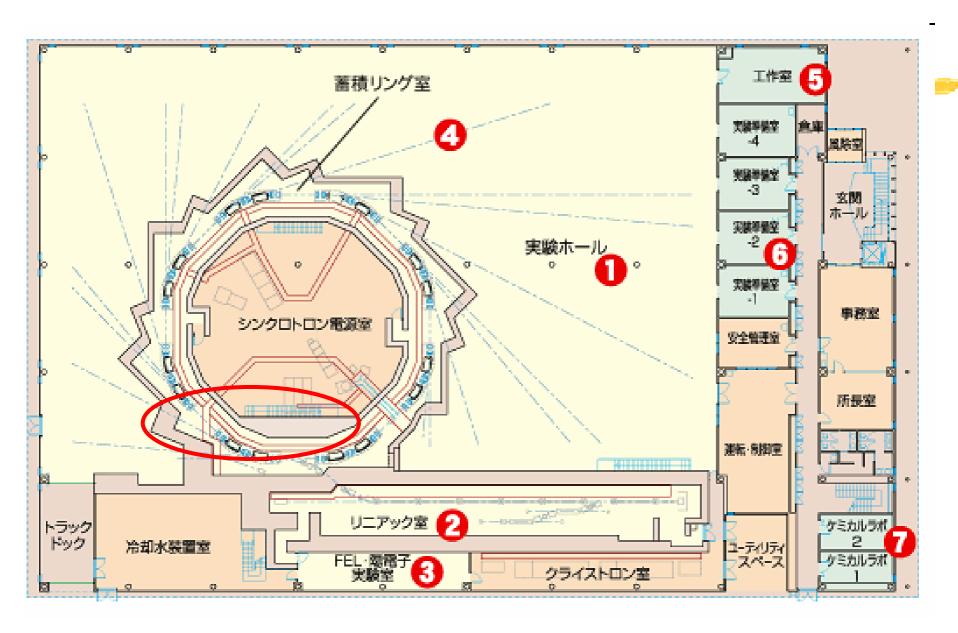
共同研究者

- 1) <Konan> S. Goko, A. Makinaga, H. Akimune, T. Kaihori, S. Houhara
- 2) <AIST> H. Toyokawa, K. Kudo, A. Uritani, Harano, T. Matsumoto
- 3) <Kyoto> H. Ohgaki
- 4) <Numazu> K. Sumiyoshi
- 5) <NAO> T. Kajino
- 6) <Darmstadt> P. Mohr
- 7) <SPring-8> H. Yonehara, K. Soutome, N. Kumagai, H. Ohkuma,
- 8) <Texas A&M> Y.W. Lui
- 9) <Univ. Libre de Bruxelles> M. Arnould, S. Goriely, M. Rayet
- 10) <0rsay> E. Khan
- 11) <JAEA> H. Harada, F.Kitatani, K.Y. Hara, T. Hayakawa, H. Shizuma

ニュースバル レーザー逆コンプトンガンマビームライン



佐賀リングでのLCSガンマビームライン構想



天体光核反応率

熱的に励起された原子核

$$\lambda^*_{\gamma \mathbf{n}}(\mathbf{T}) = \frac{\sum_{\mu} (2J^{\mu} + 1) \lambda^{\mu}_{\gamma \mathbf{n}}(\mathbf{T}) \exp(-\epsilon^{\mu}/kT)}{\sum_{\mu} (2J^{\mu} + 1) \exp(-\epsilon^{\mu}/kT)}$$
(nucleus in state μ)
$$\lambda^{\mu}_{\gamma \mathbf{n}}(\mathbf{T}) = \int_{0}^{\infty} c n_{\gamma}(E, T) \sigma^{\mu}_{\gamma \mathbf{n}}(\mathbf{E}) d\mathbf{E}$$

$$\gamma 透過係数$$
auser-Feshbach model cross section

Hauser-Feshbach model cross section

$$\sigma^{\mu}_{\gamma n}(\mathbf{E}) = \pi \chi_{j}^{2} \frac{1}{(2J_{j}^{\mu} + 1)(2J_{j} + 1)} \sum_{J^{\pi}} (2J + 1) \frac{T^{\mu}_{\gamma}(J^{\pi})}{T_{\text{tot}}(J^{\pi})} \frac{T_{n}(J^{\pi})}{T_{\text{tot}}(J^{\pi})}$$

$$T_{n}(J^{\pi}) = \sum_{v=0}^{\omega} T^{v}_{n}(J^{\pi}) + \int_{\varepsilon^{v}}^{\varepsilon^{max}} \int_{J^{v},\pi^{v}} T^{v}_{n}(\varepsilon^{v},J^{\pi}) \left[\rho(\varepsilon^{v},J^{v},\pi^{v}) d\varepsilon^{v} d\pi^{v} dJ^{v} \right]$$